

共同討議の論点をめぐって

長谷川 宏 二

農業経営研究の陣営に所属している関係もあって、発想なり考え方が農業経営問題に引きつけられてしまう訳だが、「村落生活の変化と現状」という課題の下での研究会、共同討議を通じて、農業経営問題がどう位置づけられるのかに主たる関心をおいてきた。まだ十分整理ができておらず、このままでは課題化もできない状態にあるが、共同論議を通じての論点として考えてほしいと思う点を二、三あげてみたい。

農業経営研究サイドで今問題になっていることは、農業生産の担い手は存在しているのだが、農業生産力の担い手がなくなりつつあるという現実の中で、農業経営をどう展望できるのか、ということである。つまり激しい農民層分解・全般的落層化の中で、これまでのように農業生産力担当層を見出し難い状況にまでなっている。このこと自体、生活破壊の一面を端的に示すといえるが、こうした状況の中から新たな生産力主体をどうとり戻してゆくのか、そこでの経営形態なり経営組織はいかなるものなのか、といったことが重要な課題になっている。

右の課題への接近に当って、自作農体制の解体、つまり小土地所有と利用・経営の分化という実態をふまえて、地域の農地を農業としてもっとも都合のよいように利用し、経営できる能力の持主⇨生産力・経営主体⇨個別であれ集団であれ⇨にその利用管理を任せてゆく方向が展望されている。そうした体制づくりの母胎として、生産・生活の共同組織である部落が位置づけられている。

さらに、今後の農業経営を展望しようとする場合、地力再生産の問題をはずす訳にはいかない。その基本は輪作であるが、個別経営でそれを進めることが困難であるため、地域輪作・地域複合というようなことで新しい合理的農業の方向が指向されている。その際の地域単位として、土地利用と水利利用の地域的最終単位である部落が据えられる。

このように、社会的空間と地理的空間の重層構造の中に部落を見出し、農業の展開方向に沿ってそれを位置づけようというのである。換言すれば、生産力の担い手問題と土地利用（地力）問題の結節点として、部落が据えられている。

農業経営研究サイドの説明が長くなったが、こうした部落のとり上げ方は、農業、農村の現実にもさまざまな動きをふまえながら、農業の本質にたかえったところでうち出されていることに注目すべきであろう。

ところで、右にみたような農業経営研究サイドの問題認識からすれば、共通課題をめぐる一連の論議の中で、土地問題―所有・利用―に関する議論が乏しかったように思われる。かつて共同体論がくり広げられた際は、当然のこととはいえ土地所有問題が核心に据えられていたことを思えば、そうした議論の乏しさが気になるのである。村落生活といふ農村生活といふ、その基礎は土地にあることには変りはないのだから、土地問題をそれなりに位置づけておくことが、論議を進めていく上で不可欠なのではなからうか。

次に、先の生産力主体の形成にかかわって、部落が、右のような意味での結節点たり得る社会的な内実は一体どういふものが問われなければ

ならないように思われる。つまり新しい生産力・経営主体が生まれ育つような部落とは、どのような社会構造をもつものなのかということである。

その場合、そうした部落が歴史的にみていかなる性格規定が与えられるかという問題はあるが、それだけでなく、その現実の機能の中に、生産力・経営主体が育つような発展的な要素は全く見出せないのかどうか、あるとすればそれはどういふものが解明されるべきであろう。少くとも、そうした観点からの論議がなされても良いのではないか。

確かに、現実にも部落は、解体的変容が目立ち、特に生産の共同組織としての面は、後退してきている。しかし、なお、いろいろな場面で、その時々に応じて、部落の中に共同関係―共同活動がつけられ、活かされていることも事実である。生産力・経営主体も、まさにそうした共同関係―共同活動の中で、一定の位置づけをもちながら形成されてくるほかない。

そして、そうした現実の中からしか今後の展望を求め得ない以上、部落の中でいろいろな共同関係―共同活動が生み出され、展開してくる論理と、そこでの生産力・経営主体の位置づけが問われてよいように思う。農業経営研究陣営の中で、自分自身に課せられている課題を、共同討議の論点として論議してほしいという気持で勝手を申し述べさせていだいた。会員の皆さんから、右の課題について、いろいろ御教示いただければ幸いと思う。